

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520175

研究課題名（和文）

日本および周辺地域に波及した祝穆編書の版本研究 建陽坊刻類書の伝播に関する考察

研究課題名（英文） A bibliographical study of Zhu mu editions spread around Japan and neighbor areas; a new consideration for Jian yang commercial printings.

研究代表者

住吉 朋彦（SUMIYOSHI TOMOHIKO）

慶應義塾大学・斯道文庫・准教授

研究者番号：80327668

研究成果の概要（和文）：

本研究では、日本の中世期以降に常用された宋末の編集者祝穆制作の書物に注目し、日本および周辺地域に波及する過程を、版本研究の方法によって明らかにした。

その結果、日本における祝穆編書の受容は、『方輿勝覧』と『事文類聚』を中心とし、中世には五山周辺における宋元版の使用に限られたことが判明した。その後『方輿勝覧』は、後続の同類書に交代し、その複製が低調となったのに対し、『事文類聚』は、朝鮮や日本で流行して、近世初に朝鮮本由来の古活字本が、江戸前期には複数の明版を校合した和刻本が派生、菊池耕齋の附訓を伴う版本や、抄出された版本が、近世の学者の需要に応じ、広く行われた。

研究成果の概要（英文）：

This bibliographical research is focusing on the books edited by Zhu Mu, an editor lived in last age of Song dynasty.

Zhu Mu works were quite popular in the medieval period of Japan, especially the Gozan monks usually examined his “Fang yu sheng lan” and “Shi wen lei ju” by its Song-Yuan editions. However the “Fang yu sheng lan” was deprived the status by newly edited similar books before the early modern age. On the other hand, the “Shi wen lei ju” was printed by the old movabletypes in Japan based on its Korean movabletype edition, and also by the woodblocks based on plural Ming editions with Japanese annotation added by Kikuchi, Kosai, and another digest edition. These later Japanese editions affected Japanese scholars in the early modern age.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：版本学・祝穆・類書・建陽・方輿勝覧・事文類聚・和刻本・菊池耕齋

1. 研究開始当初の背景

日本書誌学の記念すべき成果である川瀬一馬氏の『五山版の研究』と『古活字版之研

究』は、当該分野の書目と版種の確定に基礎を与えたのみでなく、日本文化史上に出版文化の項目を位置付ける、大きな役割を果たしたが、並行して行われた、長澤規矩也、阿部隆一両氏による日本伝来漢籍の研究は、五山版や古活字版の本文系統を定めるためにも重要な手がかりを遺し、これに基づく版本の再検討が、広く求められるに至った。

そこで報告者は、平成17至19年度に、文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B)「日本漢籍の本文形成に関する研究 五山版・古活字版を中心に」を実施して、『古今韻会舉要』『韻府群玉』『氏族大全』『聯珠詩格』『詩人玉屑』等の書目につき、五山版・古活字版の形成を視点とする日本漢籍の本文系統論を試みた。当該研究では、個々の伝本のレベルから各版種の動態を観察、これに基づいて版本を比較検討した結果、宋元明版、朝鮮版と、五山版、古活字版が、複数の版本に干渉を受けながら展開し、近世の和刻本に流れ込んでいく様相が明らかになった。

また同研究で併せ行った『翰墨全書』の版本研究は、一定以上の規模を有つ書目では、本邦での版刻がなく、比較的多くの宋元明版が将来され、唐本そのものが流通し、行われた漢籍のあることが指摘された。

この時点で、日本漢籍の研究を進捗するためには、書目の拡大と共に、さらに室町期以来の元明版、朝鮮の流入と、和刻本漢籍形成過程を関係付ける、具体的な研究が必要と認識された。また、五山版、古活字版がなく、日本では複製されなかった書目でも、日本漢学に甚大な影響を与えた場合について、考慮を加える必要が生じた。

こうした条件に当てはまるのが、宋末の学者祝穆の作った編著類であり、その宋元明版、朝鮮版が、日本に於いて如何に行われたのかを、研究の主題に選んだ。

2. 研究の目的

本研究では、日本の中世から近世にかけ、学者の間に広く用いられた祝穆編集書を俎上に乗せ、その宋元明間の坊刻本が、どのように日本に波及し定着していったのか、という点を、朝鮮半島の状況を直接、間接に参照し、明らかにすることを目的とした。

祝穆編書を対象とした理由は、諸注釈書の頻繁な引用など、日本における依拠の証跡が確かかつ広範な点はもとより、中世以前には日本での刊行が認められないのに、書目によっては、近世になって立て続けに刊行されている所に、日本漢学の基盤的変動が露出するのではないかと、見込まれたためである。

このような事象の研究は、まず第一に、日本で複製された(条件によって複製されなかった)漢籍の本文形成過程を考える、書誌学

の事例研究としての意義がある。また第二に、中近世に於ける日本文化の展開に対し、並行する中国や朝鮮の文化動向が、どのような過程を経て影響を与えたのか、という問題を考える基礎としても、追究に値する。さらに第三には、学問動向の社会的背景として、出版事業の実力と生長が、どのような関係を有ったのか、という問題をも視野に収めている。

3. 研究の方法

報告者が従来行ってきた、伝存諸本に直接取材し、版本の変転と本文系統及び、その相互干渉を明らかにする手法を、本研究でも継続した。具体的には、まず設定した書目について、中国、朝鮮、日本等に散在する伝本の書誌調査を、なるべく広範に実施し、各種版本を精確に弁別、その成立と変化の動態を観察して、本文研究の基礎を確立した。次いで諸版本の特徴を検討し、本文系統の骨格となるべき、版本の依拠関係を明らかにした。さらに、版本間の関係に沿って本文を比較し、異同の性質を考え、本文どうしの干渉の様を析出した。

次に、上記の純粹に版本学的な作業に抛り、漢籍の流通に基づく日本漢学の展開について考察した。この段階では、本文系統の全体中に、日本流布の版本を特定、その意義を評価するとともに、文献資料をも勘案して、日本に於ける流通の様相を究明した。

加えて、祝穆編書版本の特色に着目し、関連の事象を取り上げ、検討した。具体的には、編集の手法そのものの共通性を、宋末成立の他書中にも探り、これらが日本の中世後期に受容された学問的脈絡を考察した他、日本漢文学の背景となった、二次的受容の事例をも検討した。また本邦近世期版刻の漢籍を特徴付ける、附訓校注の形成を研究の対象に含め、本文とは異なる訓注の学問的背景を探究する等、検討の多角化を図った。

4. 研究成果

祝穆編書の受容を視点として、中世から近世に及び日本漢学の基礎過程を考えた結果、『方輿勝覽』の受容が、中世後期の五山周辺における漢籍受容の一典型を為すことが明らかになった。同書は、南宋時代までの各地の景勝や、人物、故事、作文をまとめた、地名分けの類書とも言うべき実質を有つが、全70巻に及び浩瀚な本文を備え、宋元の禅籍や文学に親しんだ日本の五山僧にとって、必要欠くべからざる参考書とされた。

そのことを徴する現象として、日本の各地に散在する同書の宋元版は約10本に及び、その数は、中国を含む伝本の約半分を占めることが指摘され、室町中期、相国寺の僧、龜

泉集証によって、足利義政の書齋とされた慈照寺東求堂同仁齋を飾る書籍の一に選ばれている(『蔭涼軒日録』)ことも、日本に於けるその定評を示すかと見られる。

しかしこの『方輿勝覽』は、室町後期に至ると、後続の『翰墨全書』地理門に代わられたことが認められる。その理由は、『三体詩』の注説に識語を附した月舟寿桂によって語られたように、『方輿勝覽』が、版図の北半を金に奪われていた南宋時代の編著であり、中国に於ける王朝及び、行政区画の変更も重なって、元明時代の漢籍を読み解くには不十分とされたことと見られる。

『方輿勝覽』は、ほぼ宋元版のみによって行われている。南北朝から室町中期頃までの本書への需要に照らすと、日本でその出版が行われなかったことは、本書同様の稠密な版面を有つ『韻府群玉』20巻等が、南北朝に刊行されていることを考えると、当時五山周辺での出版に宛てられた資財や、刻工の厚みが、その規模に届かなかったものと考えられる。後続の『翰墨全書』や『新增説文韻府群玉』等、浩瀚かつ、明版によって多数もたらされた書目が、需要の存在にも関わらず版刻されなかった理由も同様であったと考えられ、中世後期以降は唐本による普及が、実際の需要を満たす選択肢として、ある程度有効だったことを示している。

このように、元明時代の出版情勢を遠景としつつ、広範の記述やその更新を求め、書目の交代を行った事例が、『方輿勝覽』に認められた。

また中世における祝穆編書の受容の有り様は、編成の枠組みそのものを抽出して学事に供する等、書目よりも知識の体系化を準的とする傾きが感得された。

旧鈔本時代に行われた『藝文類聚』や『初学記』等、既にいわゆる類書の利用とその模倣は、日本漢学の重要な一過程であったが、宋初に李昉等の編集した『太平御覽』が、平安末以降に多数舶載されたことは、我が国に版本に基づく学問を形成する先駆となった。

しかし南北朝頃から、その主体は、朱子学の成立による学界再編後に、朱熹直弟と称する祝穆が編集した『事文類聚』に、その地位を譲っている。また、韻目によって分類された韻書の『古今韻会举要』や、韻分けの類書『韻府群玉』『氏族大全』等や、先に述べた祝穆編集の『方輿勝覽』が、地理別の類書であるなど、版本受容本格化の段階に至ると、浩瀚な本文を有効に整理分類した編著が歓迎され、中世日本漢学の一潮流を成すに至る。

この種の要求は、学問の普及した宋末以降の出版書目をも特徴付けるが、書物を通じた学習を基調とする日本漢学では、そうした要求が一層強く、韻書を機軸とする韻類書の他、意義分類の総集等も同様に歓迎された。

中世に重んぜられた総集の一『千家詩選』は、そうした要求によく応えた書目の一であり、日本僧江西龍派の編んだ『新選集』は、この『千家詩選』や、他の類書に倣って編目を立てたことが知られるが、北京大学図書館と慶應義塾大学斯道文庫に分蔵する『千家詩選』の〔宋末元初〕刊本は、版本の餘白に『新選集』からの例詩の増補を加え、その他『翰墨全書』『詩人玉屑』等の宋元間の編書からも詩篇を加えている。

これを要するに、当該の伝本は、分類門目を骨格として、本文の集約を行ったものであり、室町期に於ける日本漢学の傾向をよく体现している。こうした編著の質的普及は、このたびの研究によって捉えられた、副産物としての成果である。

また祝穆の『事文類聚』は、日本で受容された宋末の編著の中でも、格別に大きな規模を誇り、詩文総集の機能をも兼ねた編著として、南北朝以降の日本でも人気を博した。その本文は、室町期以前には、専ら元泰定3年(1326)廬陵刊本を以て行われ、五山版等、日本に於ける複製が為されなかったことは、『方輿勝覽』に同様である。

ただ本書の場合、性理学の普及を背景とし、明清や朝鮮朝を通じて需要が衰えず、そうした版本の度重なる波及が、近世前期の日本の受容をも惹起した。

具体的には、明朝を通じ、建陽地方の坊刻本が少なくとも5種刊行され、司礼監刊本も行われるに至った。これに続き、万曆32年(1604)には金陵の唐富春が、従前の6集本に、遺集を加えた7集本を版刻すると、この系統にもさらに覆刻版を生じ、明版には建陽系統6集本と、金陵系統7集本とが並び行われる情勢となった。

これを受けた我が国では、江戸初期に、6集本に基づく朝鮮刊行甲辰字本を摸した、本邦古活字本が成立した。しかし江戸前期のうち、寛文6年(1666)に、京の大書肆八尾勘兵衛が、金陵本の覆刻を行って、本書の盛行を下支えする。

この版本は、単なる金陵本ではなく、伝統的な建陽本を以て校合した点に特色がある他、各種古典の古活字本に移録され、流通していた附訓を、拾い集めて行間に附する等、様々の伝流を統合する附加価値も認められる。これに対し、延宝5年(1677)の石橋源兵衛刊本は、建陽本を主として、金陵本から遺集を補い、主要な記事を抄出して張数を圧縮する等、その普及を重んずる立場から翻刻を行っている。こうした点には、同じ書目に対する需要の多様化が、和刻本に反映する状況が観察された。これらの和刻本の本文や、修印過程の詳細を明らかにしたことは、本研究の基幹的成果の一部である。

また和刻本成立の背景に、商業出版の直接

の担い手であった書肆の活動あることは、『事文類聚』の版刻に対する八尾勘兵衛の役割に顕著であるが、一方に、本文を校合して附訓を加える版本の編者が介在し、『事文類聚』他、数種の書については、藤原惺窩門の末流に出て、雌伏と出仕を繰り返しながら近世社会の中に自立していった儒者、菊池耕斎の活動中に、編集事業の直接の契機を見出すことが出来た。

総じて、祝穆編書の受容に見る日本漢学の変転は、近世初における朝鮮版、明版の波及を受け、性理学の普及に伴う儒者の自立という実情の下に進行し、版本に基づく学問が成熟して、数種の版本の舶載と、版本を臺帳とする解釈の流布を前提とし、これらを統合編集する、重層的、集約的な版本の形成に原因しており、こうした水面下の変動が、版本による知識の体系化から、漢籍本文の意義を玩味咀嚼する水準に移っていく背景であると観察された。

こうした点は、従来総論として言及されることはあっても、具体的な版本関係や、版本編集者の活動を前提として実証されたことは、ほとんどなかった。今後は、書目を拡げ、版本複製の重層性と、その背景にも分析を加え、同趣の事例に検証を施し、日本漢籍の変転を基底とする、日本漢学史の再構へと研究を進めて行きたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

(1) 和刻本『事文類聚』考 その本文と、菊池耕斎の附訓について , 住吉 朋彦, 和漢比較文学, 48, P.91-109, 2012 (査読無し)

(2) 韻類書の効用 禅林類書試論 , 住吉 朋彦, 室町時代研究, 3, P.141-186, 2011 (査読無し)

(3) 『千家詩選』と『新選集』 国清寺旧蔵本をめぐって , 住吉 朋彦, 斯道文庫論集, 45, P.99-138, 2011 (査読無し)

〔学会発表〕(計2件)

(1) 和刻本『事文類聚』考 その本文と附訓について , 住吉 朋彦, 和漢比較文学学会第30回記念大会, 2011年9月24日, 筑波大学

(2) 『千家詩選』と『新選集』 国清寺旧蔵本をめぐって , 住吉 朋彦, 第62回日本中国学会学術大会, 2010年10月9日, 広島大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

なし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

住吉 朋彦 (SUMIYOSHI TOMOHIKO)
慶應義塾大学・斯道文庫・准教授
研究者番号: 80327668

(2) 研究分担者

なし。

(3) 連携研究者

なし。